

流水

神村ふじを

流水は仲春の季語。海水が凍って氷の塊となり、やがて割れながら海を漂い、主に1月下旬から3月下旬にかけてオホーツク海沿岸に押し寄せる。

中川イセは1901年(明治34)、山形県東村山郡千布村(現天童市)に、父今野安蔵、母サタの三女として生まれた。父親は根っからの博打うち、母はイセが数え年2歳のときに亡くなった。学業のよくできたイセだったが、貧困の極みであったため、11歳で家を出て、子守り、女中奉公、芝居小屋の下働き、製糸工場の女工と、様々な職を転々とした。ある時、妻子持ちの祭文語り に騙されて暴行され、18年(大正7)に17歳にして女兒を出産、未婚の母となった。

翌19年(大正8)、北海道に渡り、網走の遊廓に入った。根っからの開けっ広げな性格もあり、一時は遊郭一の看板遊女となったが、牧場経営者である中川卓治に身請され結婚した。

戦後、女性の参政権が認められ、「学歴のない女でも選挙に出られる」との言葉に発憤し、市議選に出馬、女性初の網走市議会議員となった。その後、7期28年に亘り市議会議員を務めた。イセの最大の功績は、網走の上水道の敷設である。網走のどこの水もアンモニア臭が強く、主婦たちは洗濯にも炊事にも難渋していた。当時の網走の年間の一般会計予算は1億6千万円だが、試算された費用は約3億円に上っていた。イセは東京の日本鋼管と直接交渉し、自分の牧場の持ち馬150頭を担保にすることを提案。さらに「網走の子どもたちの将来のために命を懸ける」と畳みかけた。このイセの必死の決意に日本鋼管側が折れ、交渉が成立した。

50年(昭和25)、網走市の人権擁護委員に就任し、女性解放運動に携わった。自身の遊郭での体験から、女性を惨めにさせることは、イセにとって許しがたいことであった。その後、全国人権擁護委員連合会婦人問題委員として、全国規模の女性問題にも取り組んだ。

一時は遊女になるまでに落ちぶれたイセ。そこから這い上がる強靱な精神力と体力。まさに女性の地位向上の手本になるような人生だった。

68年(昭和43)、彼女をモデルにしたドラマ「流水の女」がTBS系列で放映された。

呻くかに流水の音湾を占む 藤原照子